

21世紀水倶楽部だより

発行：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部
発行者：亀田 泰武
編集：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部 広報担当
〒171-0011 東京都豊島区目白2-1-1
URL <http://www.21water.jp/>
E-mail info1@21water.jp

第38号 2015年6月9日号

——— 本当の親友・旧友のあり方を知る ———

理事 巽 良雄

この歳で、病気になって真の友達のありがたさを知った。

実は、昨年7月に膵臓癌告知を受けた。4月頃から疲れが激しく、変だなと思って総合病院で診てもらったら、黄疸が判明し、膵臓癌であるらしいと言われた。癌の場合、本人に告知するかどうか○印を付けるようになっているので、○印を付けておいた。7月初めに呼び出しがあり、主治医を訪ねて、室をトントンとノックして入ったらドクターが開口一番「あんた一人で来たの？普通、親兄弟等3～4人で来るもんだよ！」と言われた。

次に、このままでは余命3ヶ月と言われ、ショックであった。そこでセカンドオピニオンの紹介状を欲しいと言ったら2週間ぐらいでもらえた。「もし、手術するときはこちらでよろしく」とも言われた。

結局4ヶ所の病院、医者相談したが、見立ては同じであった。

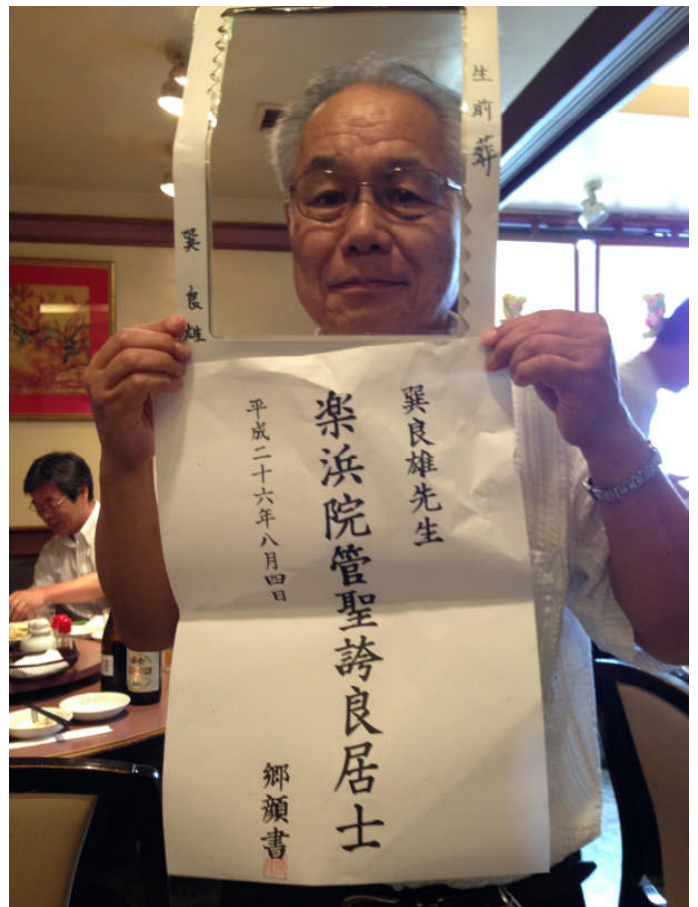
その時、ある大先輩が、「たっちゃん、医者にはプライドがあるから・・・」と心配してくれた。

中でも、時に、親戚関係で知り合いの医者にも親身に相談にのってもらった時のコメントは、「オペもいいけど、腹の中は切ってみないと何がわかるかわからないし、最近ではかなり良い抗癌剤が出ているので、これ以上は本人の決断である。」と結論付けてくれた。今更手術もないと思い、抗癌剤対応に決めた。

ところで、本当の医者からあと余命3ヶ月と言われたときは、家に帰るのも恐ろしく、「ああ～正月もダメかあ～？！桜の花もダメかあ～」と思った。何も手につかず年賀状の用意もしなかったら、親友が親友を通じて、「たっちゃんから年賀の返事が来ないけど・・・」、「どーしている？」と問い合わせがあった。即、賀状の返事と電話にて詳しく会話ができました。

一方、たっちゃんがピンチらしいと聞き及んだ親友が励ましてあげようと『生前葬』なるものを開催してくれた。

本当に親友とはありがたいものだと痛感しました。



また、先日はゴルフ仲間が、そろそろ暖かくなったからと、コンペを用意してくれたので参加しました。なにしろ50年も前から一緒に草野球、親睦旅行へと遊んだ仲間、特に優勝までさせてもらい、優勝の弁などと言われ、「優勝はもちろん、このように旧友・親友と楽しく、笑いながらプレーができ、感無量です。」と挨拶させてもらいました。

本当によかった！

(次頁トップは生前葬参加者集合写真)



2015 年度活動報告

研究集会「活性汚泥法処理施設の設計・運転と電力消費」報告

理事長 亀田泰武

1, 開催主旨

活性汚泥法誕生百年記念企画研究集会の第3回となるもので、さる5月15日に(公財)日本下水道新技術機構8F中会議室を拝借し開催。

活性汚泥法施設運転のために大量の空気を送り込むなど多量の電力が必要で、下水道の電力消費は全国の0.7%にのぼっている。下水道の省エネが課題になったのは第一次石油ショックの頃で、これまで機器の技術進歩がある一方で設計条件と実運転の乖離があること、制御装置など立派なものが設置されている一方で施設別の電力消費が計測されるようになっていないことなど省エネはそれほど進んでいない状況で、大半の処理場が運転開始している現在、これらの既存施設の省エネが大きな課題となっている。電力消費は少ない方がいいが、現実には送風機がよくできていて何十年も持つことや、活性汚泥はタフであるが生物なので調子が悪くなると回復が容易でないなど、難しい課題となっている。

原発の停止により、電力のCO₂発生原単位が上昇し、例えば東京電力では4割も増えていて、一層の省エネが求められている。これから今回OD法を含む活性汚泥法水処理施設について消費電力の実態、省エネ方策の効果と問題点、今後の課題などを説明、討議して頂くこととなった。

2, 講演及び質疑

日本下水道新技術機構 石田 貴部長からは、省エネ機器は進

んでいるものの、実際の省エネは進んでいなくて、その状況や、水中攪拌機の問題点や系列毎のアンモニア性窒素を指標とした風量の最適化などの解決手法などのお話があった。(株)電業社機械製作所坂本 浩部長からは、最も電力を消費する送風機の機能、その特性、系列別の配置などの解説をしていただいた。最後にメタウォーター(株)鈴木 和美シニアアドバイザーから小規模処理場を視点に置いた、問題点やハードソフトに渡る解決策、大中処理場の電力消費が大きいので省エネが特に必要なことなどの話があった。

その後、清水 治 副理事長がコーディネーターとなり、質疑に移行した。機器の特性、運転方法、民間委託のあり方など幅広い質疑が続いた。

3, 研究集会を終わって

今回のテーマは、活性汚泥水処理施設という狭い分野であるため、参加者は多くないと予想していたが、58名と多くの方が参加された。

省エネを実施していくには、制約因子が多いなかで地道な努力が必要で、一方、管理責任者側の実務能力低下があり、関係者の連携の一層の強化が必要であると感じた。



木更津の干潟(盤州干潟)見学会報告

理事長 亀田泰武

7回目となる木更津の干潟見学会を企画した。昨年とほぼ同じ5月19日の大潮の日。諸事情により実施日の決定が遅くなり、声をかけたのは常連になってしまい、参加人員は4人と少なかった。昨年と同様アサリの生息密度は高く、岸近くから相当沖まで小さいアサリがけっこう生息する一方、食べ頃の少し大きなアサリは多くなかった。また、バカ貝など他の貝も非常に少なかった。

熊手で掘って、いくつもの小さいアサリのなかから土産用の少し大きいものを選ぶような状況。収穫量は昨年と同じ1.5kg程度。今年も貝殻模様が様々に面白く、ホームページに載せることに。

少し沖の方で、糸を出して少し大きなアサリにしがみついている稚貝を発見。わざわざ糸をだすというのはエネルギーを大きく消耗することになる。貝類がほとんどいない多摩川河口干潟ではけっこうのアサリ稚貝が糸で大きな貝とつながっていた。たまた



ま見つけたのでよく分からないが、木更津も稚貝が流されやすい底質になっているような感じであった。以前潮干狩り場管理の人にアサリの生息量が年ごとに大きく違う要因として、稚貝が大風で流されてしまうからと聞いたこと

があった。筆者はアサリが全国的に減少している問題について、土砂流入が減って、稚貝が流されない安定した底質になっていないからではないかと考えている。伊勢湾では生息環境改善のためダム堆砂を干潟に入れたりしている。

大潮でしか行けない沖の方ではアサリなどが殆どいない一方、アサリを捕食するツメタ貝のお椀型の卵塊が多かった。今回、イソギンチャクを発見。浮遊物が多いこんなところでよく生きているもの。 桃色の植物の苗のようなものを沢山出しているミズヒキゴカイという生物もはじめてであったがこちらはけっこう生息していた。

大型の耕耘機で干潟をかき回して、どうも底質中の嫌気化抑制を目的としているようで、機械は比較的新しくなった。

会員だより

デング熱と雨水枡

竹石和夫

夏になると毎年、蚊の発生に悩まされている。いわゆる蕨蚊、ヒトスジシマカで、庭に出るとたちまち群がって刺されるし、しばしば家の中にも侵入して捕物騒ぎである。なぜ蚊が多いのか不思議に思っていたが、気が付いたのが道路の雨水枡で、雨水枡には泥溜があり、上から覗くと確かに水が溜まっている。そこで昨

年9月であるが、周辺の雨水枡20箇所余りを観察したところ、8割位の枡の上には、ヒトスジシマカが数匹舞っており、雨水枡が発生源であることはほぼ間違いないと思われた。

昨年夏、蚊に刺された人がデング熱に感染し、最終的に162人の患者が出て、公園の閉鎖やイベントの中止等社会に不安を与えた。デング熱のウイルスを媒介するのは、日本ではヒトスジシマカとされ、今年も蚊の発生期を迎え流行が懸念されている。

デング熱の対策としては、蚊の発生を防ぐことが重要で、自治体では住居周辺の水溜りをなくすよう呼び掛けている。植木鉢の皿、排水溝、放置された空缶等であるが、注目されるのは「排水溝」に表現される雨水枡である。何故なら他の水溜りについては、住民自らなくす対応が取れるが、雨水枡は泥溜に水を溜める構造であり、住民には清掃位はできても根本的な対策は難しい。

実際、雨水枡が蚊の発生源であることは既に知られており、雨水枡を巡回し薬剤を撒いている自治体もある。雨水枡について設計指針は深さ15cm以上の泥溜を設けるとし、維持管理指針では清掃は年1回と例示している。これは道路の枡でも同様である。

対策としては、維持管理面では清掃や薬剤散布があるが、雨水枡は道路に20m程の間隔であり、宅地枡も考えると数は膨大である。また蚊は2週間程で成虫になり、雨の度に枡の清掃や薬剤を撒くことも難しい。そこで、構造面で対策ができないかが課題になる。泥溜は雨による土砂等の流出を防ぐためのも



ので、それには清掃が必要であるが、殆ど実施されていないのが実態であろう。そもそも泥溜が設けられた理由は、舗装が未普及の時代に管路への土砂流入が多かったためと思うが、状況は変わっている。



自治体の薬剤散布の対応は泥溜が必要なことを前提としているが、清掃もされていない実情が知られた場合、必要性に疑問が投げかけられると思われる。人の健康を守るべき下水道が、蚊の発生源になっていることは憂うべき事態

であり、温暖化に伴い蚊の媒介する感染症の拡大が懸念される状況からも、雨水枡の泥溜は早急に廃止すべきと考える。会員諸兄のご意見を賜ればと思う。

編集幹事のあと整理

○ 巻頭文は巽理事、愛称「たっちゃん」の闘病体験記。生前葬での戒名は、本人が掲げている挿入写真から「楽浜院管聖誇良居士」と読めます。横「浜」市で「管」渠の仕事をされ、お名前から「良」の一字をとったのはわかりますが、「誇(る)」の一字は漢字の意味通りか、戒名授与の郷顔師匠に聞いてみましようか？実は編集幹事子の実家はお寺です。実際、戒名を考案するときにはこの師匠のような方法で故人のデータを聞いた上でゆかりの漢字を組み合わせるようです。

- 5月15日の研究集会「活性汚泥法処理施設の設計・運転と電力消費」。報告文を担当の亀田理事長からいただき掲載しました。詳細の報告文は後日HPにアップする予定です。
- 同じく亀田理事長担当の例年の干潟見学会、報告文をいただきました。海棲生物は潮流などに流されないよう工夫をしているのですね。
- 会員だより、竹石和夫会員から雨水枡の功罪の罪のほうの話です。昔の都市環境に合わせた基準を墨守している人間のほうが「罪」ということでしょうか？
- 会員だよりの連載もの齋藤均会員はご家庭の事情で休載です。
- 会員だよりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月